

フランコプロヴァンス語における普通名詞の単数形、複数形 —ラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ語について—

大河原 香穂

0. はじめに

現代の標準フランス語では普通名詞の単数形、複数形は音声的には単複同形である場合が多い。ロマンス諸語における普通名詞の単数、複数の対立についてはかねてより研究がなされており、Glessgen (2007: 55, 59, 69)によれば、ラ・スペツィア＝リミニ線を境に、-sの有無により対立を表す西ロマンニアと、母音の違いによる対立を表す東ロマンニアで傾向が異なることがわかっているが、過去のフランスの方言における普通名詞の単数、複数の区別の詳細な分析はこれまでのところあまりなされていない。特に、西ロマンニアと東ロマンニアの間あたりに位置するフランコプロヴァンス語地域全体に特化した研究は過去に存在せず、本研究では同地域における普通名詞の単数形、複数形について分析を行う。また本研究では、フランコプロヴァンス語においても、普通名詞の単数、複数の区別に語末が大きく関わると予測し、分析の際は特に語末の無強勢母音の音色の違い¹⁾による単数、複数の区別に着目している。そのため、分析対象の普通名詞を選ぶにあたって、語源の語末の形態が揃っていれば異なる複数の普通名詞を分析対象としても対照しやすく、より一般化した結論が得られやすいだろうと推測し、分析対象の語をラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ普通名詞に限定した。以上をふまえ、本研究ではフランコプロヴァンス語における、ラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ普通名詞の単数形、複数形について扱う。

1. 背景説明

1.1. 過去のフランスの方言における普通名詞の単複の区別を扱っている研究

本研究に関連する研究として、過去になされたフランスの方言における単複の区別を扱っている研究を2つ紹介する。1つ目はBouvier (2003)である。この研究は20世紀半ばのドローーム県内のフランコプロヴァンス語地域に該当する地点の方言における音韻変化を主題とし、分析を行った研究だが、同方言における普通名詞や形容詞の単複の区別も副次的に扱われており、語末の母音の音色の違いによる単複の音声的な区別の実例を挙げている。例えば、Bouvier (2003: 108)によれば、ドローーム県のジェイサン²⁾の方言では現代の標準フランス語の形容詞 *petit* 「小さい」に該当する語について、単数形は[pətɛ]、複数形は[pəti]と発音される。すなわち単数形[-ɛ]、複数形[-i]という語末の母音の音色の違いによって単複の区別を行っていると考えられる。このような例は、20世紀半ばのフランコプロヴァンス語地域の一部で見られた、語末の母音の音色の違いによる単複の区別の例だと見なすことができる。

2つ目はTuailon (1971)である。この研究内では、『フランス言語地図』*Atlas linguistique de la France* を用いた19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスのロマンス諸語の地域とその周辺部の方言における男

性名詞 *cheval* 「馬」の単複についての分析がなされている。語源にあたるラテン語の対格の単数形 *CABALLUM* と複数形 *CABALLOS* の段階では音的に異なっていた。しかし *Tuailion* (1971 : 145)によれば、北フランス（以下北仏）を中心とするオイル語地域では、ラテン語の形態から音声変化を経てもなお単数形と複数形で音的に異なっていた状態から、類推によって、複数形として使用されていた語形が単数形としても使用されるようになり、単複同形になった地点が多く見られた。反対に、南フランス（以下南仏）を中心とするオック語地域では、*Tuailion* (1971 : 145)によれば北仏のように類推は起こらず、ラテン語から音声変化を経た状態の単数形と複数形がそのまま保存される傾向にあった。そのため南仏では 19 世紀末でも単数形と複数形が音的に異なっている地点が多く見られた。このように方言における *cheval* の単複を詳細に分析した研究は存在するが、他の語について詳細に分析した研究は過去に存在しない。したがって、本研究は*cheval*以外の普通名詞の方言における単複の区別を扱うという点で新規性があると言える。

1.2. フランコプロヴァンス語とは

以下ではフランコプロヴァンス語地域の地理的側面と言語的特徴を順番に解説する。*Bert et al.* (2009 : 15-17)によれば、フランコプロヴァンス語地域はフランスのみならず、スイス、イタリアを加えた 3 か国にまたがっている。そのため本研究の分析対象として、フランス国内の地点に加えてスイス、イタリアの一部の地点も扱っている。地図上で示すと、*Bert et al.* (2009 : 13)からの抜粋である図 1 中に *Francoprovençal* と示されているフランス東部からスイスのフランス語圏、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州にかけて広がっている地域が該当する。



図 1. *Bert et al.* (2009 : 13)からの抜粋であるフランスとその周辺部における言語区分の地図

この地域は、図 1 から見て取れるように、北はオイル語と、南はオック語地域と接している。また、地理的に遠く離れてはいるが、*Bert et al.* (2009 : 17)によればイタリア半島にフランコプロヴァンス語の飛び地があるが、本研究では扱わない。

フランコプロヴァンス語に見られる顕著な言語的特徴の 1 つとして、5 種類の語末の無強勢母音が存在することが挙げられる。*Tuailion* (2007 : 15-16)によれば、フランコプロヴァンス語は[a], [i], [e], [o], [ɔ]の 5 種類の無強勢母音を持つ。一方、北仏を中心に広がるオイル語地域では、*Tuailion* (2007 : 17)によれば、9 世紀以降に語末の無強勢母音は[a]となり、その後無音化した。したがって、この特徴は、隣接する言語区分の

オイル語との大きな違いの1つである。また、Tuailon (2007: 38)によれば、フランコプロヴァンス語の語末の無強勢母音には性や数、動詞の人称を区別する文法的機能があった。例えば、Tuailon (2007: 17)によれば、フランコプロヴァンス語地域のとある箇所では、現代の標準フランス語の女性名詞 *vache* 「雌牛」に該当する語については、単数形[*vatsi*]、複数形[*vatse*]という対立が見られる。すなわち、単数形[-i]、複数形[-e]という語末の無強勢母音の音色の対立によって単複の区別を行っている。なお、ここでは[-i]と[-e]という単複の対立を取り上げたが、Tuailon (2007: 16)によれば、実際にはフランコプロヴァンス語地域内の場所によっては語末の無強勢母音は[-i]や[-e]とは異なる音色の母音に変化しており、[-i]と[-e]以外の対立が見られることも想定される。以上のことから、フランコプロヴァンス語におけるさまざまな普通名詞において、語末の無強勢母音の音色の違いによる単複の区別の例が見られるのではないかと仮説を立てることができる。

2. リサーチクエスション

以上を踏まえ、ここで本研究における2つのリサーチクエスションを提示する。

- A. ラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ語について19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランコプロヴァンス語地域では音声的に単複異形²⁾である地点はどこで見られたのか？
- B. それらの音声的に単複異形である地点ではどのような語末の無強勢母音の音色の対立によって単複の区別を行っていたのか？

期間を19世紀末から20世紀初頭に限定している理由は以下で解説する。

3. 分析の対象と方法

3.1. 分析対象のデータと地点

本研究では『フランス言語地図』*Atlas linguistique de la France* (以下 *ALF*) を分析対象のデータとしている。ALFはJules GilliéronとEdmond Edmontによって作成された言語地図である。Gilliéron et al. (1902: 25-28)によれば、同言語地図の作成のため1897年から1901年にかけて調査が行われた。リサーチクエスションで期間を限定している理由はこのためである。ALFではコルシカ島を除くヨーロッパのフランス全土とスイス、イタリア、ベルギーの一部といった周辺のロマンス語圏に加え、イギリス王室領であるチャンネル諸島も扱っている。収録されている地図の合計枚数は1920枚である。地図上の各調査地点には地点番号と共に話者から採取した語形が音声記号で表記されている。ここで使われている音声記号はALF独自のものだが、本研究ではUniversité Toulouse-Jean JorèsのLe projet SYMILAによって公開されている対応表³⁾により、IPAに変換して表記する。

分析対象の地図と語は、ALF中の全地図、語から以下の3つの条件に則って絞り込んだ。

条件Ⅰ：1枚の地図だけで分析対象の各地点における単数形、複数形双方の形態を確認できる語

条件Ⅱ：ラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ語

条件Ⅲ：1枚の地図上の分析対象の地点で見られる全ての語形が、同一のラテン語を語源に持つ語

この条件から、本研究では以下の2つの地図と語を分析対象とした。

表 1. 本研究の分析対象の地図と地図上で扱われている普通名詞⁴⁾

ALF上の地図	分析対象の普通名詞
ALF0946 oreille ; oreilles	oreille f. 「耳」 (< lat. AURICULA f. 1. 「耳」)
ALF 1349 vache ; (garder) les vaches ⁵⁾	vache f. 「雌牛」 (< lat. VACCA f. 1. 「雌牛」)

本研究では ALF の地図のうちごく一部である 2 枚の地図のみを分析対象としているが、1 枚の地図のみを扱うのではなく、複数の地図を扱うことで、1 つの普通名詞にのみ特有な事象ではなく、本研究のリサーチクエスチョンへの答えとなり得る、同じ曲用のラテン語の名詞を語源に持つ複数の普通名詞に共通して見られる傾向が分析結果として得られると考えられる。

分析対象の地点は ALF の全地点のうち 104 地点である。この中には勿論フランコプロヴァンス語地域の地点を含んでおり、同地域に該当する地点は 75 地点である。また隣接する言語区分の地点を扱うことで、言語区分の境界線の影響で異なる様相が見られることが確認できる可能性がある。そのためオイル語地域、オック語地域の地点のうち、フランコプロヴァンス語地域との境界付近の地点も分析に含めた。そのためオイル語地域の 16 地点、オック語地域の 13 地点も扱っている。フランコプロヴァンス語地域の境界線の確定のためには Le projet SYMILA の web ページで公開されている ALF の各地点の言語区分⁶⁾を参照した。なお、ALF に見られる行政区画は調査が行われた当時の区画である。

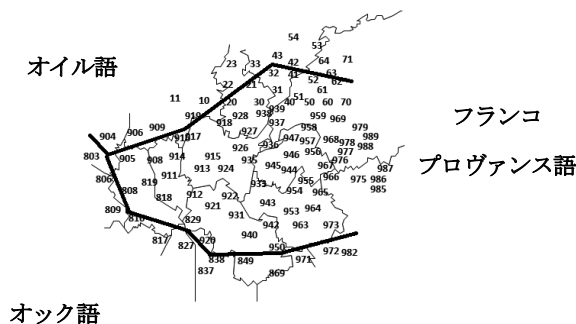


図 2. ALF 上の分析対象の地点と言語区分

ところで、ALF にはいくつかの問題点があると考えられる。例えば Séguy (1973 : 68)は、ALF を作成するための方言話者への調査の際に、原則として話者が最初に発音した語形を採取したことを批判している。また Gilliéron (1902: 4-6)によれば、この時翻訳形式の調査、すなわち標準フランス語における語形や文を提示し、それらの語が各地点の方言ではどのように発音されるのかを尋ねる調査が行われた訳だが、Séguy (1973 : 68)は、話者に対する調査が進むにつれ、疲労と退屈により、話者は提示された標準フランス語における語形をその地点の方言らしく発音しただけの語形を回答してしまい、それらの語形が話者の回答として ALF 上に収録されてしまっている可能性があるとして指摘している。そのため、実際の方言における語彙や、形態統語的現象が記述されていない可能性がある。しかしながら、ALF のようにさまざまな語彙や表現について、フランコプロヴァンス語地域全体と周辺のオイル語地域、オック語地域の方言データが 1 つの言語地図にまとまっている例は他に類を見ない。したがって、同地域全体の方言を俯瞰するためには、他の資

料と比較して ALF がより適していると考えられる。

3.2. 分析の方法

以上のデータを分析するにあたって、それぞれの地図について、分析対象の地点でどのような方法で単複の区別が行われているかを確認した。そして、以下の表 2 に従って各地点を分類した⁷⁾。

表 2. 単複の区別の方法に基づく分類⁸⁾

単複同形か単複異形か	分類記号	分類	分類の説明
単複同形	×	sg = pl.	単複同形
	●	sg. [-a] / [-i] pl. [-ə] / -ø ⁹⁾	単数形は[-a]あるいは[-i]、複数形は[-ə]あるいは[-ø]
単複異形	◎	sg. [-ə] / -ø pl. [-e]	単数形は[-ə]あるいは[-ø]、複数形は[-e]
	▲	sg. [-e] pl. [-ə]	単数形は[-e]、複数形は[-ə]
	□	sg. [-ə] pl. [-a]	単数形は[-ə]、複数形は[-a]
	○	その他の対立による単複異形	×、●、◎、▲、□以外の語末の無強勢母音の音色の対立による単複の区別
	・	語中の母音による単複の区別	語中の母音の音色や長短の違いによる単複の区別
	-	sg. または pl. の欠如	単数形と複数形のいずれかが地図上で見られない

その後、表 2 中の分類記号を各地点に記した地図を作成し、詳細な分析を行った。

4. 分析結果と議論

4.1. 分析結果

以下の図 3 は、本研究の分析方法に基づいて 2 枚の地図の各地点を分類した結果である。

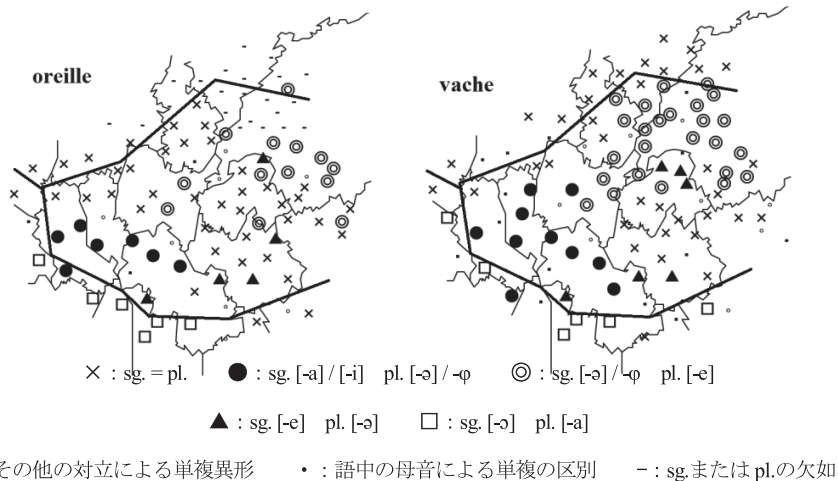


図 3. 分析結果の地図

図 3 の分析結果のうち、oreille についての各地域における各分類の地点数は以下の通りである。

表 3. oreille についての各地域における各分類の地点数

単複同形か単複異形か	分類記号	分類	フランコプロヴァンス語地域 (全75地点)	オイル語地域 (全16地点)	オック語地域 (全13地点)
単複同形	×	sg = pl.	33地点	4地点	3地点
	●	sg. [-a] / [-i] pl. [-ə] / -ø	6地点	0地点	1地点
単複異形	◎	sg. [-ə] / -ø pl. [-e]	12地点	1地点	0地点
	▲	sg. [-e] pl. [-ə]	5地点	0地点	0地点
	□	sg. [-ə] pl. [-a]	0地点	0地点	6地点
	○	その他の対立による単複異形	6地点	0地点	2地点
	・	語中の母音による単複異形	2地点	0地点	1地点
	-	sg. または pl. の欠如	11地点	11地点	0地点

表 3 より、単複異形の地点 (●、◎、▲、□、○の地点の総数) はフランコプロヴァンス語地域で 29 地点、オイル語地域で 1 地点、オック語地域で 9 地点確認された。このうち○その他の対立による単複異形の地

点の詳細に触れるとフランコプロヴァンス語地域ではローヌ県の地点 911、イゼール県の地点 922, 950 で sg. [-i] pl. [-e]、スイスのフランス語圏の地点 936, 937 で sg. [-a] pl. [-e]、スイスのフランス語圏の地点 978 で sg. [-ə] pl. [-i] という対立が見られ、オック語地域ではドローーム県の地点 869 で sg. [-a] pl. [-æs]¹⁰、イタリアのピエモンテ州の地点 972 で sg. [-ə] pl. [-a] という対立が見られた。また、図 3 の分析結果のうち、vache についての各地域における各分類の地点数は以下の通りである。

表 4. vache についての各地域における各分類の地点数

単複同形か単複異形か	分類記号	分類	フランコプロヴァンス語地域 (全75地点)	オイル語地域 (全16地点)	オック語地域 (全13地点)
単複同形	×	sg. = pl.	21地点	12地点	2地点
	●	sg. [-a] / [-i] pl. [-ə] / -φ	9地点	0地点	1地点
単複異形	◎	sg. [-ə] / -φ pl. [-e]	24地点	1地点	0地点
	▲	sg. [-e] pl. [-ə]	6地点	0地点	0地点
	□	sg. [-ə] pl. [-a]	0地点	0地点	6地点
	•	その他の対立による単複異形	8地点	0地点	1地点
	•	語中の母音による単複の区別	7地点	3地点	3地点
	-	sg. または pl. の欠如	0地点	0地点	0地点

表 3 より単複異形の地点 (●、◎、▲、□、•の地点の総数) はフランコプロヴァンス語地域で 47 地点、オイル語地域で 1 地点、オック語地域で 8 地点確認された。このうち• その他の対立による単複異形の詳細に触れるとフランコプロヴァンス語地域ではスイスのフランス語圏の地点 50、ジュラ県の地点 938、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州の地点 987 で sg. [-a] pl. [-e]、アン県の地点 913 で sg. -φ pl. [-ə]、ソーヌ＝エ＝ロワール県の地点 918 で sg. [-o] pl. [-e]、イゼール県の地点 922 で sg. [-i] pl. [-e]、オート＝サヴォワ県の地点 967 で sg. [-e] pl. [e]、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州の地点 985 で sg. [-e] pl. [-e] という対立が見られ、オック語地域ではドローーム県の地点 869 で sg. [-a] pl. [-æs]¹⁰ という対立が見られた。

4.2. 議論

以上のことからフランコプロヴァンス語地域内で顕著に見られる事実として、2 つのことを挙げる事ができる。1 つ目は、主に北東部と南西部で語末の無強勢母音の音色の違いによる単複の区別がよく見られるということである。すなわちこれらの地点は、母音の違いによって普通名詞の単複の区別を行う東ローマニア的特徴を示す地点だと言える。特にスイスのフランス語圏を中心とする北東部では◎ sg. [-ə] / -φ pl. [-e]の対立がよく見られる。具体的には oreille についてはスイスのフランス語圏で 7 地点、アン県で 2 地点、オート＝サヴォワ県で 1 地点、サヴォワ県で 1 地点、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州で 1 地点見られた。vache についてはスイスのフランス語圏で 15 地点、ドゥー県で 2 地点、ジュラ県で 3 地点、アン県で 3 地点、オート＝サヴォワ県で 1 地点見られた。この事実に関連して、Bec (1971: 362)ではスイスのフリブール州やヌーシャテル州の大部分、そしてヴァレー州やヴォー州における方言をフランコプロヴァンス語の北部方言と分類しており、この地域は西のジュラ山脈と東のゲルマン語地域に挟まれた非常に孤立した地域で統括する中心地も欠いているため、独自の発展を遂げていても不思議ではないとしている。◎ sg. [-ə] / -φ pl. [-e]が見られる北東部は Bec の主張する北部方言の地域とは完全に一致する訳ではないものの地理的に近い地域である。したがって現段階では断定はできないが、北部方言という区分と◎ sg. [-ə] / -φ pl. [-e]が見られる北東部には何らかの関係があるのでないかと仮説を立てることができる。

また、特にリヨン周辺地域を中心とする南西部では● sg. [-a]/[-i] pl. [-ə]/-φ の対立がよく見られる。具体的には *oreille* についてはロワール県で2地点、ローヌ県で1地点、イゼール県で3地点見られた。*vache* についてはロワール県で1地点、ローヌ県で3地点、イゼール県で4地点、アン県で1地点見られた。この事実に関して、Gardette (1968 : 16)によれば、ローヌ県とロワール県は1つのリヨン教区を成していたことがわかる。● sg. [-a]/[-i] pl. [-ə]/-φが見られる南西部はこの教区とは完全に一致する訳ではないものの地理的に近い地域である。よって、現段階では断言はできないが、南西部で● sg. [-a]/[-i] pl. [-ə]/-φがまとまって見られる事象には、リヨン教区という区分が関係しているのではないかという仮説を立てることができる。

これらの◎ sg. [-ə]/-φ pl. [-e]や● sg. [-a]/[-i] pl. [-ə]/-φのような対立が生まれたメカニズムを解き明かすには、フランコプロヴァンス語におけるラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ普通名詞の一般的な単複の対立からの変化を知る必要がある。一般的には、Tuailon (2007 : 15-16)で示されているように女性名詞では sg. [-a]/[-i]¹¹⁾ pl. [-e]という対立¹²⁾が見られる。しかし Duraffour (1932 : 210)によれば[-i]について[-i]>[-ə]>-φという変化が見られる地域も存在する。また Tuailon (2007 : 121-122)によればフランコプロヴァンス語地域の一部における[-a]の無音化や[-i]の[-ə]への変化や無音化が起こる地域も存在する。したがって◎ sg. [-ə]/-φ pl. [-e]が多く見られる北東部では、複数形の語末の無強勢母音は保たれ、単数形の語末の無強勢母音の弱体化が起こったと推測される。また Bec (1971 : 365)によればいくつかの方言では複数形の[-e]は無音化する。そのため分析の中で見られた複数形の[-ə]は、[-e]から無音化する中間段階の状態だと考えられる。そのため● sg. [-a]/[-i] pl. [-ə]/-φが多く見られる南西部では、単数形の語末無強勢母音は保たれ、複数形の語末の無強勢母音の弱体化が起こったと推測される。以上から北東部と南西部では単数形と複数形どちらか一方で語末の無強勢母音の弱体化が起こった場合、もう一方は保たれる傾向にあると言える¹³⁾。

2つ目はフランコプロヴァンス語地域のうち北西部から北部にかけての地域と南東部において× sg. = pl. の地点が多く見られるということである。すなわち、西ロマニアに分類される現代のフランス語同様の単複の区別のタイプである。なお、現代のフランス語は音的に単複の区別が存在しないため、西ロマニア的特徴である語末の-sによる単複の対立とは異なると見なされるかもしれないが、Duval (2010 : 113-122)からもわかるように現在のように音的に単複同形である状態に至るまでに語末の-sによって単複の区別を行っていた時期があった。このためか Glessgen (2007 : 69)でも西ロマニアに分類されている。したがって、フランコプロヴァンス語におけるこれらの× sg. = pl.の地点も同様のメカニズムを経た西ロマニア的な地点である可能性がある。但し、決定的な証拠はないため、可能性があるという指摘に留めておく。このような地点は、具体的には *oreille* についてはジュラ県で6地点、アン県で4地点、ソーヌ＝エ＝ロワール県で1地点、ローヌ県で1地点、ロワール県で1地点、イゼール県で1地点、オート＝サヴォワ県で6地点、サヴォワ県で6地点、スイスのフランス語圏で2地点、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州で1地点見られた。*vache* についてはドゥー県で1地点、ジュラ県で1地点、アン県で1地点、ソーヌ＝エ＝ロ

ワール県で1地点、ロワール県で1地点、オート＝サヴォワ県で2地点、サヴォワ県で7地点、スイスのフランス語圏で3地点、イタリアのヴァッレ・ダオスタ州で3地点見られた。このうち南東部においてまとまって× sg. = pl.の地点が見られる事象はかつてこの地に存在したサヴォイア公国の領域が関わっているのではないかと考えられるが、現段階では決定的な証拠は見つかっていないため、断言を避ける。

また隣接する言語区分の地点の詳細を確認すると、分類の地理的分布にフランコプロヴァンス語とオック語、オイル語の境界線が関わっているとも考えられる。まずオイル語地域では *oreille* については主に -sg. または pl. の欠如の地点¹⁴⁾が東側で見られ、× sg. = pl. が西側で見られる。*vache* については4地点を除いて全て× sg. = pl.の地点である。これらのオイル語地域における× sg. = pl.の地点の語末の母音は全て無音化している。したがってオイル語地域では、やはりオイル語の特徴が見られる。ここでフランコプロヴァンス語地域内の× sg. = pl.の地点で、かつ語末の無強勢母音が無音している地点を確認すると、*oreille* についてはジュラ県の地点 20, 21, 30、ソーヌ＝エ＝ロワール県の地点 918、ロヌ県の地点 908, 914、ロワール県の地点 905 が該当し、*vache* についてはドゥー県の地点 32、ジュラ県の地点 20、ソーヌ＝エ＝ロワール県の地点 918、ロワール県の地点 905 が該当し、全てオイル語地域との境界線に沿って存在することがわかる。よって、フランコプロヴァンス語地域内でこれらの地点が見られる理由は、隣接するオイル語地域からの影響であると推測することができる。

次にオック語地域については、フランコプロヴァンス語地域には見られない□ sg. [-ɔ] pl. [-a]が多く見られる点で特徴的である。この□ sg. [-ɔ] pl. [-a]の対立は、Tuailon (2007: 66-67)によれば、オック語的対立である。以上のことから、境界線付近で分類の分布の様相に変化があることがわかる。

5. 結論

以上の分析からリサーチクエストへの答えを提示する。リサーチクエストはA「ラテン語の第1曲用の女性名詞を語源に持つ語について19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランコプロヴァンス語地域では音的に単複異形である地点はどこで見られたのか?」、B「それらの音的に単複異形である地点ではどのような語末の無強勢母音の音色の対立によって単複の区別を行っていたのか?」である。まずリサーチクエストAについて、音的に単複異形である地点は主にフランコプロヴァンス語地域の北東部と南西部で見られると言える。またリサーチクエストBについては、北東部ではsg. [-ə]/-ø pl. [-e]という対立が、南西部では[-a]/[-i] pl. [-ə]/-øという対立が多く見られると言える。この分析結果は、西ロマニアと東ロマニアの間あたりであるこの地域において、普通名詞の単複の区別について西ロマニアの特徴と東ロマニアの特徴が混在していた可能性があるとして解釈でき、これまで言われてきたロマンス諸語における東西対立についての更なる知見が得られたと言える。また、本研究からフランコプロヴァンス語地域と、隣接するオイル語地域とオック語地域との境界線付近で単複の区別の分布の様相に変化があることがわかった。以上を踏まえ、今後の課題として以下の2つを挙げる。1つ目は、今回の分析結果における単複の区別の分類の分布について、更に詳細な人文地理的分析を行うことである。本研究でも一部歴史的、宗

教的、地理的区分について触れたが、決定的な証拠には至らず、未だ分析の余地がある。2つ目は、*ALF*を用いてラテン語の他の曲用の名詞を語源に持つ普通名詞に対して同様の分析を行うことである。これらの普通名詞について、本研究の結果と同様の結果が見られるのかどうかを探求することは非常に興味深い。

註

本稿は、日本ロマンス語学会第58回大会（ホームページ上開催、2020年5月16日・17日）において発表を行った際の資料を基に、内容に修正を加え、論文化したものである。

1) 本稿では、あごの開閉の度合い・舌の形・唇の形によって決定される母音の種類の違いのことを「母音の音色の違い」と呼ぶ。齊藤(2020:73-75)では「音色」ではなく「分類」という用語を使用していたが、定義を定める際に参考にした。

2) 「1.3. フランコプロヴァンス語とは」で示したように、同地域では語末の無強勢母音の音色の違いによる単複の区別が見られるのではないかと仮説を立てることができる。本稿では、語末の無強勢母音の音色の違いによって単複の区別を行っている場合に着目し、以下「単複異形」と称する。本研究で分析対象とした資料では、語中の音色や長短が単複の区別に関わると考えられる地点も見られたが、絶対数が少ないため、これらの地点を「語中の母音による単複の区別」として分類して別個に扱い、詳細な分析を行わない。

3) http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notation_phonetique

4) 分析対象の普通名詞の語源については、*Französisches Etymologisches Wörterbuch*を参照した。

5) 括弧内は、地図上で扱われている語が現れる文脈を表している。

6) <http://symila.univ-tlse2.fr/alf/lieux/>

7) 地点によっては第2形も存在したが、本研究では第1形のみ扱うこととする。

8) 各地点の分類を行う際、音声的な類似により、[-e], [-ẽ]は[-e], [-a], [-a]は[-a], [-o]は[-o]として扱った。また、本研究はあくまで音色に着目しているため、発音の強さや長短が互いに異なる母音でも音色が同じであれば同じ種類の母音として扱った。但し、語末の無強勢母音の長短の違いによって単複の区別を行っていると考えられる例が見つかったため、これらを暫定的に「その他の対立による単複異形」に分類する。

9) 本稿では、語末の母音が脱落している状態を-φと表すこととする。

10) これらの対立は複数形の語末の子音[-s]による対立だとも考えられるが、単数形と複数形で語末の無強勢母音の音色にも違いが存在するため、暫定的に・その他の対立による単複異形の地点として扱う。

11) Tuailon (2007: 15-16)によれば、単数形については一般的に口蓋化しない子音の後では[-a]、口蓋化した子音の後では[-i]が見られる。

12) *ALF*上では点在してわずかに見られる程度だが、*oreille*について。その他の対立による単複異形に分類された地点987での sg. [-a] pl. [-e]、地点922,950の sg. [-i] pl. [-e]や、*vache*について。その他の対立による単複異形に分類された地点50,938,987の sg. [-a] pl. [-e]、地点922の sg. [-i] pl. [-e]という対立は、一般的な対立が保持された結果だと考えることができる。

13) ▲ sg. [-e] pl. [-ə]の地点については絶対数が少ないため、本稿では分析を割愛する。

14) sg.またはpl.の欠如の地点は *oreille* にのみ見られるが、この理由は *oreille* が双数的名詞であるためだと考えられる。本研究の本筋からは外れてしまうため、この現象についてはここでは論じない。

参考文献

BEC, P. (1971). *Manuel Pratique de Philologie Romane Tome II*, Paris : A. & J. Picard.

BERT, M. et al. (2009). *ETUDE FORA : Francoprovençal et Occitan en Rhône-Alpes*, Lyon : Université Catholique de Lyon.

BOUVIER, J. -C. (2003). « Mutations phonologiques en cours dans des parlers francoprovençaux », *Espace du langage Géolinguistique, toponymie, cultures de l'oral et de l'écrit*, Aix-en-Provence : l'Université de Provence.

DURAFFOUR, A. (1932). *Phénomènes généraux d'évolution phonétique dans les dialectes franco-provençaux d'après le parler de Vaux-en-Bugey (Ain)*, Grenoble : Institut Phonétique de Grenoble.

DUVAL, F. (2010). *Le français médiéval*, Turnhout : Brepols.

GARDETTE, P. et al. (1968). *Atlas linguistique et ethnographique du Lyonnais, Volume 4*, Paris : Editions du CNRS.

GILLIERON, J. et al. (1902-1910). *Atlas linguistique de la France*, Paris : Honoré Champion.

GILLIERON, J. et al. (1902). *Atlas linguistique de la France : Notice servant à l'intelligence des cartes*, Paris : Honoré Champion.

GLESSGEN, M. -D. (2007). *Linguistique romane : Domaines et méthodes en linguistique française et romane*, Paris : Armand Colin.

SEGUY, J. (1973). « Les Atlas linguistiques de la France par régions », *Langue française 18*, Malakoff : Armand Colin.

TUAILLON, G. (1971). « Analyse d'une carte linguistique : « cheval-cheveaux » (ALF 269) », *Travaux de linguistique et de littérature ; 9,1*, Paris : Klincksieck.

TUAILLON, G. (2007). *Le francoprovençal*. Aoste : Musumeci.

斉藤純男 (2020), 『日本語音声学入門 改訂版』, 三省堂.

URL

WARTBURG, W. von et al. (1922-2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch ; Eine darstellung des galloromanischen sprachschatzes (Vols. 1-25)*, Bonn : Klopp ; Leipzig : Teubner ; Basel : Helbing und Lichtenhahn ; Bonn/Basel : Zbinden, retrieved on 29 September 2020 from <<https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/>>.

Le projet SYMILA, retrieved on 29 September 2020 from <<http://symila.univ-tlse2.fr/>>.